

平成21年3月6日
宇宙開発戦略専門調査会委員 毛利 衛

日本の有人宇宙開発シナリオ

1. 国際協力 国際宇宙ステーションから、月、火星ミッションへ応分な協力
参加のためには日本特有の技術力、国際貢献力が必要。内容はすべて国際オープンな計画
2. 日本固有 無人有人混合した日本の独自方式 内容は部分的に国際オープンな計画
有人部分のスケジュール確定は予算と技術の進行によって柔軟に行う、
産業界で日本が強い技術分野を基本にビジネス展開を波及させるロードマップを持つ
(ロボット、センサー、材料、映像、通信および日本の伝統文化の強い技術を生かす)

国家目標として 「日の丸人型ロボット月面歩行計画」

有人・無人の議論を超えた第3の道 日本独特な有人宇宙開発の提案

有人宇宙技術と無人宇宙技術の粋を集めスピン・インにより最少予算での効率化を図ると同時に最大のスピン・アウトを社会に還元させるシステム構築に基づく

- ①二足歩行ロボット研究の目標、期限設定をはっきりすると開発が急速に進む
- ② 全自動で月着陸船を月面に着陸させ試料採取、月から地球に帰還、回収できる
総合システムの開発。 他国の有人月着陸より先に実現する。
- ③ 有人用の2分の1スケールの宇宙船を開発・製造する
- ④有人月探査を人型ロボットでシミュレートする
- ⑤極限宇宙環境利用でロボット技術を高度化し地上における産業戦略へつなげる
- ⑥月への有人探査を可能にする宇宙船の開発へつなげる
- ⑦生命の損失を最小限にする日本人の価値観を尊重する有人宇宙開発になる